

月報 63号

発行所

青丘文庫

編集・発行★韓 哲 曦

〒654 神戸市須磨区須磨寺町4-3-1

メゾンド青丘ビル2階

TEL(078)734-5989 FAX 735-0660

報告

在日朝鮮人運動史研究会関西西部会創立十二周年
『在日朝鮮人史研究』二十号発行記念

シンポジウム

在日朝鮮人史研究の現段階

一九九一年二月一〇日、神戸学生青年センターにて

〈主催〉 在日朝鮮人運動史研究会関西西部会

〈後援〉 青丘文庫、神戸学生青年センター、むくげの会、兵庫朝鮮関係研究会

二月には珍しい暖かい雨が降るなか、関東甲信越からの遠来の参加者もあり、七〇名を越える人が集まり、開始前のロビーは人いきれにむせ返った。

関西西部会の十二年目と会誌の二十号を記念するこのたびのシンポジウムは、一定の蓄積を重ねてきた関西における在日朝鮮人史研究の現状と課題を洗い出し、同時に個別研究の総合化の方向をも探ろうという狙いがあった。

プログラムは、次のとおり、記念講演と関西中心の七府県の在日朝鮮人史の概要・研究の現状と課題についての報告の二本立てで進行した。

● 記念講演

「在日朝鮮人史研究の現代的意義」

関西西部会代表 朴慶植氏

● 各地域の在日朝鮮人史に関する報告

- ① 兵庫県 堀内 稔氏（会員）
- ② 大阪府 金森襄作氏（会員）
- ③ 京都府 水野直樹氏（会員）
- ④ 奈良県 川瀬俊治氏（解放出版社編集部）
- ⑤ 香川県 佐野通夫氏（四国学院大学助教授）
- ⑥ 岡山県 石田米子氏（岡山大学教授）
- ⑦ 島根県 内藤正中氏（島根大学教授）

各地域の報告については事前にレジュメ原稿を提出していただいたので、五〇頁のシンポジウム資料集を小冊子として印刷・製本し、当日の参加者に配付した。なお、大阪府担当の金森氏は、ご家族の万やむを得ぬ事情により欠席のやむなきにいたり、レジュメだけの報告となった。

以下、簡単に内容を要約して、当日の講演と報告を紹介したい。詳細は、当日配布の『シンポジウムへ在日朝鮮人史研究の現段階』資料集（神戸学生青年センター発行、三〇〇円）と、後日刊行予定のシンポジウムの内容をまとめた出版物を参照していただきたい。

● 朴慶植氏の記念講演「在日朝鮮人史研究の現代的意義」

在日韓国・朝鮮人に関する日本の歴史記述は、「警察史」「市町村史」にみられるように、「暴動」「ヤミ商売」に参与した「悪者、やっかい者」論が多い。これは全くの歴史の偽造であり、在日朝鮮人が日本社会に貢献した肯定的側面を正しく評価した歴史認識に改めさせなければならない。

在日朝鮮人の存在は、日本の朝鮮侵略の所産である。したがって、在日朝鮮人史の研究は日本の朝鮮支配の歴史を明らかにするために重要で不可欠だ。

在日朝鮮人史の研究は、たんなる学究活動であってはならず、真実の歴史を明らかにする運動、誤った歴史認識を正す運動と結合して進めなければならない。

我々が研究対象としている在日朝鮮人とは、日本帝国主義の朝鮮侵略・植民地支配によって生み出されたものであるから、その時期的範囲は1905年の「保護国化」、1910年の「併合」の前後から出発するものであり、研究内容は、形成史、生

活史、日本当局の支配・抑圧政策史、強制連行史、生活擁護・民族独立・民衆連帯などの抵抗・闘争の運動史、さらに文化・芸術史なども含む幅広いものである。それは、日本の近現代史のなかに位置するとともに、朝鮮民族の歴史のなかに位置する二重の側面を持つ。

これまでの在日朝鮮人史研究の潮流を振り返ってみると、常に運動と研究、実践と理論が結び付いていた。まず、解放直後の金斗鎔の『前衛』論文と五〇年代前半の韓徳銖論文がその後の二つの支配的な運動理論の流れを形づくった。

その後、林光徹の『歴史学研究』の論文が初めて一般の目にふれる形で発表され、朴在一、『朝鮮月報』などの研究が現れて、本格的な研究の緒についた。

五〇年代末から六〇年代初には、共和国への帰国事業に関連して、在日朝鮮人が日本社会の関心事ともなり、盛んに生活実態調査が行われるとともに、強制連行についても着目され始めた。六三年には、関東大震災四〇周年を契機に朝鮮人虐殺に関して資料集が編まれたが、六〇年代はまだまだ研究の広がり、進展は不十分であった。

七〇年代、とくに七二年以降、日立就職差別事件や入管問題などを契機に、日本人の在日朝鮮人問題に対する関心・運動が高まり、就職問題、人権問題、入管問題などいろんな問題が提起されるようになった。この時期、総連の強制連行真相調査団が全国的に現地調査を展開したことも特筆すべきことである。

一九七六年に、東京で七人の有志が集まり、在日朝鮮人運動史研究会が生まれ、七九年には関西西部会も発足した。七〇年代後半には、『在日朝鮮人関係資料集成』などの資料集の刊行が始まり、朴慶植『在日朝鮮人運動史 八・一五解放前』も刊行できた。

さらにこの時期は、朝鮮人被爆者やサハリン在住朝鮮人の問代、北海道・北九州などの地域の在日朝鮮人についての個別研究が開始され、八〇年代に入って、各分野の研究が広がりをもつて展開され始めた。地域研究、協和会研究、映画「解放の日まで」の製作など、強制連行や労働運動についてのテーマが中心であった。また、一世個人の回想記や民族団体の団体史も多く出版され始めた。

九〇年代になると、個別研究の結合化の動きがみられ、昨年の名古屋での全国交流集会が生まれ、今日のシンポジウムもその動きのなかに位置づけることができよう。さらに昨年以來、強制連行者の名簿探し・戦後補償の提起により、新たな全国的な調査活動の展開が巻き起こっている。

在日朝鮮人は、日本政府からも、本国政府からも、二重に疎外されており、日本社会からさまざまな差別・抑圧を受けて、社会的矛盾が集中している存在である。そのようななかでの在日朝鮮人史研究は、①民族的主体性を軸に朝鮮民族史のなかで考えていくべきであり、②日本の近現代史の侵略・植民地支配の被害者・被抑圧者として位置づけ、③日本のなかの民族問題

として国際関係における重要問題である、との認識が必要である。
【要約文責 金英達】

● 各地域の在日朝鮮人史に関する報告

朴慶植氏の記念講演に引き続き、兵庫、京都、奈良、香川、岡山、島根の六府県について、各報告者からそれぞれの地域における在日朝鮮人の歴史の形成・特徴など概要と、研究の現状と課題、地域研究に関する資料・文献紹介が順次に報告された。内容は、当日配布の資料集に簡にして要をえた記述がなされているので、ここでの紹介は割愛させていただく。

今回、特に呼び掛けに応じて参加報告していただいた会員外の川瀬俊治、佐野通夫、石田米子、内藤正中の四氏の報告は、新鮮でシンポジウム参加者に多大の刺激を与えた。全般的には解放前の歴史に重点が置かれ、解放後の歴史研究に関する報告が少なかったという弱点は否めなかったが、これもまた在日朝鮮人史研究の現段階の実情を反映していると言えるのかもしれない。

報告の後、討論・意見発表の時間が持たれ、さらに場所を変えて交流会が開かれた。こちらも盛況であった。

準備段階から予感していたとおり、おおかたの参加者の期待を裏切らない内容と水準のシンポジウムを遂行できたと思う。

新図書案内

朴 定陽全集 [1～6] - 韓国近代思想叢書 -	韓國學文献研究所	ソウル	1984年
田 愚 全集 [1～8] -	//	//	//
司法稟報 [6～7] - 韓国社會史資料叢書 -	//	//	1990年
三政策 [1、2] - 韓国近世社會經濟史料叢書 V	//	//	1986年
財務彙報 [1～5] - 韓末日帝侵略史料叢書經濟篇付録 -	//	//	1987年
農書 36 - 韓国近世社會經濟史料叢書 III -	//	//	1987年
東京外国語大学論集 [第40号]	東京外国語大学	東京 同学	1990年
朝鮮の道教	車 柱環	京都 人文書院	
朝鮮黨争關係資料集37～40 [鴻集雜録7～8]	洪 重寅	ソウル 驢江出版社	
東萊史料1～4 [新發掘地域史料1～4] 金 東哲		//	//
遜溪雜稟	柳 馨遠	//	//
立齋全集 [上、下]	鄭 宗魯	//	//
朝野輯要 [上、下] - 韓国史書叢刊5～6 -	李 長演	//	//
続朝野輯要 - // 7 -	李 九	//	//

研究会御案内

在日朝鮮人運動史研究会 第131回例会

日 時 1991年3月10日 [日] 午後2時
報告者 中井 優子氏
テーマ 「高齢化問題としての在日韓国朝鮮人問題」

朝鮮民族運動史研究会 第101回例会

日 時 1991年3月17日 [日] 午後2時
報告者 李 景珉氏
テーマ 「北部朝鮮における8.15」

日、韓キリスト教關係史研究会 第14回例会

日 時 1991年3月23日 [土] 午後2時
報告者 後藤 聡氏、蔵田 雅彦氏
テーマ 「韓国キリスト教史 I」

：場所はいずれも青丘文庫にて